

第十三号

七月十一日発行

東大斗争
獄中書翰集

三食を心配しないで
喰っているというのは
心安まるものだが
それすら屈辱であるという
苦い思い。

目次

一、六月十四日	東拘より	今井 澄 (医大斗)	一
二、六月三十日	府中より	久本 幸 治 (鳥取大)	三
三、六月二三日	中野より	グバノ・イワシフ (理共斗)	四
四、六月二七日	東拘より	福 本 敏 (理共斗)	六
五、六月 某日	東拘より	三 吉 讓 (医共斗)	七
六、	//	鈴 木 琢 郎 (法斗委)	九
七、救 対 通 信		情 宣 部	一四

六月十四日 東拘より

前略

今井 澄

公判闘争、接見活動そしてまた家族会関係など、僕たち「中」の者には想像できないほどの忙しい毎日を送つておられることと思ひます。

敬意と連帯の挨拶をお送り致します。また、僕達が弁護団の皆様健康等について大変心配しておりますことも、ついでにお知らせ致します。

さて、検閲をかくぐつて伝えられる情報や推測によつて判断しますと、統一公判闘争は今、大きな困難に直面しているように思ひます。もつとも、このような「困難」は何も今になつて現われたものではなく、以前から「予定」したものです。

丁度、僕のグループの日から、欠席裁判が横行されたようです。くさすが、タカ派と目される裁判長だけのことはあります。また、医学図書館グループで九人が五日間の監置処分になつたこと、石田長官が重ねて「法廷秩序維持」と「迅速な処理」^{etc}を訓示したことなど、裁判所当局の高姿勢が強まつていくことが良くわかります。当局としても、メーデー事件の経験や「三派系」の公判の経験、それに政府の強硬な態度を全て考へて入れて「四・三分離案」を出して来たのですから、容易なことでは折れるはずありません。

僕達の方針は唯一つ「統一公判を要求し、出廷を拒否すること」だと思ひます。

そこで問題なのは、次の点だと思ひます。

第一は、当局が既に開始した「欠席裁判」をどこまで強行し続けられるかという問題です。「東京大学は一度決定したことを決して撤回しない」という厚い壁に立ち向うことから始まつたのが東大闘争でした。もちろん東大と東京地裁ではその権力中核との距離、その重みなどにおいて非常に違ふことは言ひまでもありません。

したがつて、彼らが一度開始した「分離公判」を撤回することは非常に困難と思ひます。

しかし、僕達は「東大闘争」という一つの闘争の成果を背景に持つて公判闘争を闘つているので、いや本当は、東大闘争の一環、その深化としてこの公判闘争を闘おうとしているわけです。一・一八〇一九闘争はそのためのものであつたわけです。東大闘争の一環あるいは、その深化として闘うと言ふとき、僕達は、東大闘争を普遍化し、全人民の闘いの発展に結びつけるといふことを意味していると思ひます。（裁判制度そのものを解体する」といふ方向に直接闘争を向けることは、必ずしも本筋ではないと思ひます。）

読売新聞ですから「欠席裁判」として取り上げ、「今後、欠席裁判が続けば大きな問題となるだろう」と論じています。現在の僕達にとつては、この「欠席裁判」⇨「暗黒裁判」⇨「分離公判」⇨「魔女裁判」といふことを大衆的に情宣し、組織的

な闘争を創出し、外から「裁判所」「裁判制度」を包囲するところが第一の方針だと思えます。そのためにこそ、実力出廷拒否と弁護団、保釈者（出廷）、傍聴人の一部による断平たる弁論による運動、そして、そのような法廷への一般の、新しい傍聴者の動員が必要とされていると思えます。

たとえ、どのように我々に有利な公判形式が獲得できても、活動家と家族といつた固定層しか動員できなければ、公判闘争は尻すぼみにならざるを得ないと思えます。「公判一覽表」等は大衆的に配布すべきですし、もちろん、法廷への動員だけでなく、「公判ニュース」の大衆的配布も更に重要でです。（公判内容の情宣）

話がわき道へそれましたが、要するに、前記の戦術を駆使して、大衆を動員し、大衆的裁判所抗議の声（^々）を盛り上げて裁判所を包囲し、欠席裁判による分離公判を断念、中止させることが第一だと思えます。

第二に問題なのは、既に第一の中でもある程度述べたことに関連しますが、公判闘争（法廷闘争を含む）自体の持つ矛盾をはつきりとらえておかねばならないと言ひこととです。当然のことながら、統一公判をかちとつても、その矛盾はなくなるわけではないです。

統一教対の方々が、法廷闘争を四つの次元に分けて、第一の「粉砕」は空想、第二の「大衆団交」は最大限の獲得目標、以下第三、第四も軽視すべからず、と述べているのは正しいと思ひます。ここで、再確認しなければならぬのは、公判闘争は

裁判所司法権力との闘争を通じて「被告」を取り戻し、戦線復帰させることにその目的があることとです。そして、当然のことにも、その闘争自体が、「被告」が「被告」とされたゆえんの闘争（東大闘争）を発展させたものとして闘い抜かねばならないこととです。

その場合、ともすると裁判所との闘いが、独立して一つの闘争として位置づけられがちである点を若干警戒せねばならないし、「被告」が獄中闘争を闘うことを「戦略化」してしまふ傾向も避けなければならぬと思ひます。とりわけ、こう言つては失礼かも知れませんが、ノンポリ、ラジカル（NPR）の諸君には、ラジカルの二つの意味で、行動が急進的、自己（個人）に対し根底的（自己否定^{etc}）で、階級闘争全体の中に位置づけられない「左」の方針を取る人々が多いようです。

余談になりますが、「自己否定」ではなく「自己変革」「自己批判」こそが目指されるべきです。

ですから、一部にあるとか聞く「保釈拒否」「再入所（保釈取消）」で闘う、[〃]という方針は本末顛倒した危険な方針だと思ひます。

もちろん、「戦線復帰」を至上目的に祭り上げ、事実上裁判所に屈するような方針で、気休め的に「統一要求」を行うのは論外です：

たゞ、僕に良くわからないのは、監置のことと、欠席裁判の場合の刑の軽重の問題です。

①監置について：出廷しさえすれば、保釈取消しにならないな

ら、多少の監置は避けるべきではないと思います。貴重な保釈金の没収は避けるべきだと思います。

なお、傍聴人についても同じことが言えると思いますが、弾圧が厳しい折から、半非合法時活動的対処は必要だと思います。

②執行猶予がつくつかないわは重大な違いですので弁護団、救済で充分検討していただきたいと思います。

いづれにしても、「中」の我々はあくまで出廷拒否で闘うべきですし、「大衆団交」的裁判自体には余り期待は持ちません。

中途はんばですがこれで失礼します。皆様によるしくお身体にお気をつけて

追伸：①医図書館の場合、保釈者が多いわけですが、これは逆

に、残り二名を保釈させるのに有利な条件と考え、統一公判と共に保釈を要求すべきだと思います。(そういう場として法廷を考えるべきだと思います)

②大里君の場合のように「職権保釈」「低額保釈」に当局を追い込むのも一つの方策だと思います。もちろん、この手は敵の逃げの手であり、分離公判強行の手であることはまちがいありませんし、したがって「不当な保釈」ですが、我々にとつても一定の前進、しかも実質のある前進だと思います。

喜んで「不当保釈」されるべきです。

六月三十日東拘より

久本幸治(鳥取大)

「永遠に向つての発端とするために」(1)

長い長いそれこそ長かつた「沈黙」を破つて書いてみたいと思います。生まれてこの方一事も「声」をあげなかつた者として「沈黙」のとばりをはらいのけてみよと思つてみます。

「マルクスこそ廃棄される時代が来た。」(ハク)と。「マルクスが廃棄される」創造的時間の刻みの上にぼくたちは立つているのだ。没落する「太陽」はマルクスそのものであると。

太陽系的に宇宙に発展する「類」の時代を担う人間をマルクスは自己の胎内から生み出し「出現」させることによつて彼は微笑みを浮べて死ぬるのであると。マルクスが所有しえた破砕力と創造力とを止揚する人間群がすでに生まれ出、動いているのだ。一体どこに(？)一体それは誰なのか(？)いたるところにそれこそいたるところに……である。

ぼくたちは今こそほんとうに「沈黙」ということのとつてもない、大へんな意味を知らなければならぬと思ひます。コゴエについてうめきをあげながら吐きだされる「音」や「言葉」というものがどれほど大へんなことであることかをぼくたちは知らなければなりません。宇宙が「アツク」と息をつまらせる時を自分で見つけ出し、意識的につくり出さなければなりません。

人類は今まさにそうした闘いを続けているのであることを胆に

めいじをければなりません。

市民社会総体が崩壊するということはそういうことを意味しています。人類全てが沈黙し、蒼白い宇宙に無数に点在する星々をながめて涙する時をぼくたちは経験しなくてはなりません。大いなる笑いはその時から宇宙に向つてかき消えることなくひびき渡るはずです。破壊の時代断絶の時代と言われながらもその最も深い奥底では非連続の連続という創造的営みが「沈黙」を打ちやぶつてはいないにしてもすで行なわれてゐることをじつと見つめなければなりません。

ぼくはこれこそ「生命だ」とさけばずにはいられません。ぼくたちのぼんの、ぼんのささやかな階級的斗いがそれを捕えたのだといわざるをえません。

ぼくたちの想像力発想力の深さと広がりこそ点検し続ける必要があります。ぼくたちの頭にチラツと輝き、サツとかすめて通る連想力をこそじつと見返してみなければなりません。獄中書簡集や無数のアシピラ・無数の論文、そして無数のアシテーションの中に秘められた「怒り」と「憎しみ」と「喜び」と「淋しさ」と「涙」と「笑ひ」をこそ早急にかきあつめなければなりません。

「軍団」「巨人族」「赤旗」「バリケード」「熱い連帯」「地震変動」「暴力空間」「腐敗」「のみこむ」とびあがる」「突撃する」「幻想の塔」「壁」「命」「愛」「怒号」「動乱」
etc. etc. : : 怒濤の如き勢いをもつてうねり、ぶち当たつて飛び散りながら一つの言葉へと凍りついてゆくその範跡の発す

る根源をこそぼくたちは究めなければならぬと思ひます。極北で「神」と出会いこちら側で「現実」と出合ひ、というよりなことを吉本隆明は言つていますが恐るべき慧眼と言わなければなりません。宇宙全体をゆすぶり、爆破し、それこそ、もう好きなことができる、何とすばらしい世界ではないか!!「ぼんまにもう目茶苦茶ですわ。」と顔全体を口にしてクシヤクシヤになりながら笑わなくてはなりません。

もう一度言います。コゴエながら出てくる「声」や「言葉」、そして何よりもその出発点としての「沈黙」の巨大な意味をぼくたちはとことん知り尽さなければなりません。

「死にむかつて目覚めきつた凄惨な風景」をトボトボ歩き続けて来たぼくは、今こそ「笑ひ」と「喜び」を自分のものとしなければならぬと考へています。この稿が永続への出発点であることを誓つて。ゴツツイ批判をどんどん期待します。

六月二十三日 中野より

グバノ・イウソフ（理共斗）

私の古い友人が、私同様拘置されていて、私が元気でいるかどうか心配しているという連絡があつたので、もしや、その他の同志達がどうしているんだらう等と考へてはいないかと思ひ、且つ、私にしてもバラちゃんや、フアシズムと文化大革命研究の大家やバクさんとその士学部仲間等がどうしているのだら

か等と思ひながら、土曜日の晴々とした気持を伝えるよすがにもと筆をとつている。という次第。私、人類学徒。

私に關して言えば至極元気という言葉の上にポト部で跳んだり漕いだりしていた時以来の健康を付け加える必要がある。本当に三食を心配しないで喰つていゝといふのは心安まるものだが、それすら屈辱であるといふ苦い思い。それでも権力の飯を一粒残さず食つて「明日の爲に」あるいは、肉体的拘束を解いた時の全面的な活動の保障の爲に備えていゝといつた所。

輕閉禁といふ、同志にはおなじみの懲罰を受ける前後に体重をはかるのですが、この体重計がいくらその日の寒さでセーターを着ていたとは言え、71kgを指してふるえた時にはびつくり。以来縄跳に力を入れ体をひきしめつつ体重を減らそうと必死の努力を続けている。縄跳び三千三百回、腕立て伏せ七十七回。農共斗の誰かみために肉体系よろしく、毎日一回でも多くと、跳んだりわたりしています。

今日は六月二十八日で土曜日。例によつてさし込んで来る朝日の陽だまりと一緒にひまわりのように室の中を移動していると運動の時間になつた。今日から運動オリの前の花が黄色い菊になつている。桜は濃くくすんだ葉の陰に碧苦しい夏をはらんでいるけどもプラタナスは目にも鮮やかな浅緑の葉を吹き出して、心なごませる。極くまれに、のびやかな風に飛つて漂い出したくなるような晴れやかな朝がある。こんな気持を同志諸君に伝えることはできないものか。こんな晴れやかな朝を分かち持つことは非常に貴重なことではないだろうか。

何かいいことがありそうな日と決めていたら面会の時、工学部がストライキに入つたと聞いた。晴れやかな朝は輝き渡る。同志諸君、学友諸君、心から斗争の連帯を表明する。巨大な一歩の開始。不屈の前進を続ける全国の学園斗争に万才を叫びたい。

ちやうどこの日の新聞(二七日の朝日夕刊)は統一公判から脱落した一人の事をかなりスペースを使つてわめき立てていた。「反省組」と初期に宣伝された中の幾人かはスパイじゃないかと思はれる程の者がいて、私は苦々しい思いを抱いていたのだけれど、この一人を誰がせめられようか。これは私達の内のある部分の敗退であり、斗争が私達の成長にとつて、不可欠であるのは、このように、正に最後の勝利の爲に死すべき者を明確に掲出する点に存在する。今、たとえ一般的であれ、斗争の高揚期に、私が私自身の問題として、一言言つておきたいのは、敗北を著積するといふ事だ。どのように小さな斗争に於ても、たとえ、個人的な領域におけるそれにおいても、何が死んだのか、あるいは何が正に死滅すべきなのかを明確にさせることは極めて重要である。それ故に同時に生き発展すべきものを明示することも。

その事の一つ。獄中書簡集第九号救対通信は、先日、「進撃」十二号を読んだ時と同じ様な絶望感を私に抱かせた。断つて置くが私はノンセクトラジカルではない。だが東大斗争の全過程の重要な一端を理学部で大衆運動家として描いて来た。私には東帝国土主大学解体等という無内容をスローガンを見ることは

耐えられない。このゴロ合わせのスローガンは、斗争のエネルギーの直接的形態、その現象的似姿の一步も出てはいはしない。このことに関して言つて置くことは、我々の斗争の総体がそれをおおひ小市民的外被を實踐的に突き破る為に重要なことの上だ。

ちやうど、日大生の斗争が東大斗争に「占拠した校舎を破壊しないなんてナンセンスだ」という衝激を与えた時、日大斗争は、校舎が資本の現実の姿として、日本大学資本の圧制の肉体化として見えなければその斗争は嘘だということをも東大斗争に指し示した。東大生は「退廃しているのは我々自身だ」という鋭い自身の切り込みを行いつつ、自由な自己活動の外観の下、万人の万人に対する戦いを斗いつつ競争を通じて資本の下に隷属して行く、エリート日東大生日自らを見出したと宣言した。この二極は、その現象形態を固定されたまま帝大解体となり「自己否定」となり下つてゐる。

私は、この拘置の間に「なぜ斗うのか、敗北が見えてゐるのか」という問いへの答は、あるいは、その問いの深化は「いかなる斗争と団結がその先に労働者革命を見うるのか」でなくてはならないことに気付いた。今、私達が七十年代斗争のふちに立つて、自らの斗争と団結に最後の点検を加える時、現象の波の上で一般的戦斗性を弄んで左翼だと思ひ込むことを峻拒し、最後に勝利する団結とは何かを問わねばならぬ。

帝大解体なる斗いは、個別権力への斗いであると教対通信の情宣部（？）が言う時、その個別権力とは東大権力というほど

のものを意味している。これは何だ？

自らの斗いは、東大の枠内で東大権力を全学封鎖で（？）相手にまわすほど過激化したという程に学生運動主義的斗争観は、先に述べた二者が持つていた資本日社会的権力への斗争が一切見え、従つて、学生の斗いが自らの限界を自らの手で明らかにしつつ、労働者階級の斗争と結合を開始して行くという、プロレタリア統一戦線への学生運動の生死をかけた接近が問題にもすることができない。従つて、東大斗争の、真崎猛哲言ふところの神秘化が始まるのだ。全面的にはてなく豊かに、全ブルジョア秩序を覆いつくすまでに現実に広がつて行く斗争の展開の展望を持たぬ日言うならば、教育斗争の根底的課題であり、共産主義運動の一つの任務である分業の廃棄をその視野に収めることができぬ、帝大解体なるスローガンは、教育施設がそのものとしてすら学生を圧迫し支配していることへの反逆のエネルギーの即自的固定化なのだ。残念、枚数が尽きた。同志、革命の現在性を！

六月二十七日東拘より

福本 敏（理共斗）

弟よ

弟へ

僕は君が僕とおふくるとの母子相姦の結果ではないかと

不安だつたのだ

つい最近まで

弟よ

君はこの世の最も悲惨な階級の解放の斗いに参加するな

弟よ

君は君と僕とのつながりの中にある醜さを捨てようとするな

弟よ

君は革命家になるな

君は父を捨てるな 母を捨てるな

弟よ

君はそんなに小さいのに不眠症を訴えるのだね

弟よ

君はそんなに小さいのに人間の秘密を知っているのだね

弟よ

君はあまりにも天才だ!

弟よ

だから僕は君の天折を予感しているのだ

弟よ

君はたやすく死ぬな

弟よ

だが君は知つておけ

君の兄貴は馬鹿げていたけれど

誠実であるうとしたことを

弟よ

(君はたやすく死ぬな)

六月某日東拘より

三 吉 讓 (医共斗)

宮本君 お元気ですか

まず連絡事項

大分前から、毎週水・木宮川さんに来てもらっていましたが、

色んなことを頼んでいたのですが、二日連続なのは不便なので

そのうちの一日を、外の月・火のどちらかと変えて下さい。

それから、外の諸君の面会は週一回で結構です。長期化してき

ましたのでその方がゆつたりしいと思います。そうすると

一日余りですが、それは予備にとつておいて下さい。ふらつと

面会に来たくなた人のために。

以上 連絡事項は終り

-7-

さて、どうしていますか、この前面会で会つた時、顔色が大分黒ずんでいるようにみえて、苦勞をしたなと思いました。

体にだけは気をつけて下さい。

僕は、日がたつにつれてゆつたりとしてきています。ここで

よく考えることは、いかにとじこめてみたところで、本人に確

信があるかぎり、志は絶対に奪えないということです。政府支

配層とか、或いは最近の裁判官まで自民党なみの知性を示して

くると、逆に自信をつけてきます。半年ぐらいたつた方が逆に

年数なんか大したことではないと感じてきてはいよいよに思いま

す。

それから、最近は、日本の歴史はじまつて以来といつていいけど、あちこちに大衆的な運動がおきています。全然何にもしていない人でも、みな何か不満をもっており、何かしなくてはならないことを何処かで感じている。このようなことは今までなかつたことで、ツーカーで通じ合える状況をあちこちで作つていけそうです。今のベトナムのサイゴンの状況などをみても、そのように、これぐらいに基盤がなければ革命というのは成功しないようです。

それにしても、僕が感じるのは、外の諸君はどうも自信がたらないように思います。知性の上でも、情熱の上でも、誠意の上でも、体制側の人間よりは、僕らの方がはるかにすぐれているのだから、自信をもつて堂々とやればいいと思います。（この点、毛沢東の愚公山を移す、という話はいいことをいつています）。世間の人間は、みな家族とか、個人的な利害があるもので、そんなに急には動けません。しかし、必ずどこかで共感しているものです。意識としては反激していても、無意識ではひきつけられているものです。

だから、でかい展望を持つて、大きいイメージをもつて、堂々としかもこつこつとやつていくことが必須だと思えます。

授業再開阻止で、僕は必ずうまくいくと思つていましたが、うまくいつていないようです。だが、あのやり方はまずいと思います。物理的に阻止することが目的ではなく、政治的に勝利することが目的だから、「再開阻止、医団交要求、大学立法阻止」の決起集会をひらいて（医局から学生まで、支援を含め

てすべて集め）、そこで堂々と封鎖なり、何なりをする。この場合、たとえ機動隊が導入されて、再封鎖ができなくても、沢山集まることにより参加者の意気が大いにあがり、又政治的効果も大きかつたでしょう。

且りすぎて、木をみて、森をみていないな、と思いました。

それから、前にも書きましたが、自己否定といふことを余りにいすぎます。それは基本的な精神の問題で、決意の問題です。しかし、それは現実の行動目標とは違います。（混同してはとんでもない間違いです。）現実の行動目標は、現在の状況では、大学立法阻止で、それに東大をいし、医学部の独自の課題がくつきまます。我々の行動を先頭にして、たとえそれには直接参加できなくても、支援ないし共斗できる部分を周辺に組織していく。現実のスローガンとして、大学解体をいわなければ、大学立法阻止をいつても無意味だというのは、折角政府がいいテーマを与えてくれるというのにそれを生かすすべをしらないというものです。又自己否定は、そのみでは、思想としての言葉の持つ意味を又イメージを無視しています。

大学立法に関して、はやくも政府に投げやりなムードができてきたようですが、まつたくばかな奴らだと思えます。だが、ばかだからといつて油断してはため、彼らも新陳代謝を行つて少しは賢くなつていくでしょう。生産者米価の実質的低下を行つて、農民層という保守政権の基盤が動揺を深めていくこれからがチャンスです。

だが最近東大の諸君が、四・二八に引き続き六・一五にも大

力量を加しているのは心強いかぎりです。それは今まで東大共闘が全力をかけて斗ってきたからだと思う。僕のみる所 日大の諸君はまだ斗いの苦勞持续的なとりくみがたまりません。だが彼らも、高経大と同じく、必ずや再度その雄姿をあらわしてくるでしょう。そのころには出たいものです。ではお元気で、みんなによろしく。さようなら。

六月某日小菅より

鈴木 琢郎

この前、掲載された僕の手紙は、全然公開を予定していなかった全くの私信だったので、公衆の面前に不意に裸で現われてしまったというような気恥ずかしさと、自分の文章が活字になつた時、誰もが感じる気恥ずかしさが、アマalgamを形成して、読みながら、若干顔を赤らめた次第。

松葉ボタンはもう最盛期を過ぎました。権力の用意した松葉ボタンの美しさに胸を震わせているというのは、あまりほめられた図ではなけれど、自然への「思い」と生きた人間との *Verkehr* への欲求が日増しに募っていく今日、この頃です。

さて、この前は感性をそのまま表現したような手紙を書いたので、今日は少しばかり論理の鎧をつけて、僕自身の違つた一面を表現してみたいと思います。

過日、「前進社」という所で発行された「大学斗争」という本が入つてきたので読んでみました。いくつか問題点を感じまし

た。批判すべきものを批判しないでおくという事は、精神の安定を欠く事になるので、「王様の耳はロバの耳」とばかり、暗い穴の中に向つて言葉を投げ込まねばならぬほどには *Verkehr* が疎外されていないことを若干、幸福に思いつつ、ペンを取る次第です。

この本の著者は「大学斗争は帝国主義とスターリン主義の虚偽のイデオロギーの支配に対する人間回復の斗い、マルクス主義の回復の斗いである」と言う。僕はここを読んでいて、水におぼれないようにと、重力の思想と果敢に斗う「感心なドイツ人」を思い出した。イデオロギーの人間支配が前提されている。ヘーゲルを転倒させたのは誰だつたのか。僕はマルクス主義者だから斗うのもなければ、マルクス主義を「物質化」するためには斗うわけでもなく、まして、マルクス主義を回復するために斗うのもないだろう。「私はマルクス主義者ではない」と言つたのは誰だつたのか。自分の「斗い」の根拠である、自分自身の現実的矛盾を捨象した、こういう宗教的構造を共有する限り、「自己否定」ではなく「自己変革」だ、と叫んでも空しい。そこでは「ばらばらの個人と市民社会」が前提されている。十全な意味において「自己変革」というのは、この本の著者の言う「革命の立場に立つ」というような「価値観の変革」などではなくして、人間関係を變えるということである。人間が變わるというのは人間関係が變わるという事以外の何ものをも意味しない。オルグというのは単に機動隊とぶつかる事のできる自党派の支持者を拡大するというような事ではなくして、自分自身を人間として獲得する事

革するための、同じ事だが、他者と自分との関係を人間的な関係として形成するための、人間の「血を吹くような生命活動」なのだ。(僕は以前の「組織者」ではなかつた僕自身を、この前の手紙で否定的に総括したけれど、まさにそうした過去の僕の残渣としての不充分性こそ、マキヤベリズムという口実を自分に許してしまつて黙否を貫徹できなかった理由だと思ふ。)

「革命の立場」なり、「反スタの立場」なりを「獲得した」と称して、自分を「聖別」するのは「はらばらの個人と市民社会」を前提しているからである。全世界の全ての人々との人間関係が人間的なものとして変革されない限り、自分自身を人間として獲得するに解放する事はあり得ないという立場からは、自身自身を「聖別」というような事は起こり得ない。僕は「戦略」の事はよく解らないが、これが「世界革命」という事の根底的な内容なのだと思つてゐる。

スターリニズムというのは、人間を支配してゐる(？)一つのイズムではなくして、人間的結合の不充分性なのだ、分業(就中、精神労働と肉体労働の二考える部分と行動する部分の分離潜在的敵対)と私有財産の秩序の刻印を受けた、そのようなものとして「個人生活の対立」を止揚してゐない、不十分な人間の結合のあり方なのである。「国家は個人生活の対立のうちのみ存在し得る」、組織に団結の中に「個人生活の対立」を孕んでいるが故に「国家」を止揚することのできない組織のあり方、それこそが、スターリニズムの土台なのである。だから「反スタの立場」の獲得なるものによつて自分自身をスターリ

ニズムから解放したと思ふのは危険である。

「人間的結合」と言つても、それはブルジョア社会との対象的な関わり方だ。「斗い」によつて規定されるわけだからこの本の著者達の「斗い」の質を見てみよう。「帝国主義大学解体」というスローガンが掲げられてゐる。このスローガンの背景には、大学が「帝国主義の人民支配の一つの楨杆」になつてゐるといふ認識がある。この認識はそれ自体として誤つてゐるといふわけではないが、多くの点で全く一面的である。まず、何よりも「学生」、
「研究者」という主体が抽象されてしまつて、大学が全く「外」から見られてゐる。それ故に「学生」「研究者」が何故に斗わなければならぬかという必然性が各自の社会内定における矛盾において明らかにかたはされるのではなく、「自己」と直接無関係な「帝国主義の一般的な罪悪」人民の苦痛」のために斗うという構造になつてゐる。「大学解体」論そのものが「自己否定」論の極限的な昇華形態であるわけだから、こうした事は「自己否定」論の一面性に通じるものである。上記の事をもつと反省してみよう。ここで大学も「外」から見ている眼は「市民社会」を前提にした狭量な眼である。「精神労働者」それ自身の苦痛、一面性、惨めさを見るのではなく、「精神労働者」に幸福(やましい)ものであるが)という前提に立つて、「精神労働者」へのユタヤ的羨望を秘めた「人民」の裏返しの反撥に「インテリゲンチヤとしての良心」(同書)を以て応えるという構造になつてゐる。なるほど「精神労働者」は「肉体労働者」よりも、相対的にはより「物質的豊饒」を保証されてゐるかも知れないし、「資本」のエ

「ジェント」として「肉体労働者」を「支配」とするといふ事の中で「疎外された力」を感じているかも知れない。しかし、本質的な意味において、人間の貧しさは「物質的なそれ」ではなくして、それを土台とした人間関係の貧しさ、人間的活動の貧しさである。だから「感嘆して自分を肯定している」とうした「精神労働者」自身の偏狭こそが問題なのである。僕らにとつて「精神労働者」の予備軍としての日々の生活は生き生きとしたものであり得たであろうか？断じて否！その事については前の手紙に書いたのでここでは繰り返さない。大学として現前する市民社会における即自的な生（擬似的生）は「人間は毎日24時間づつ死んで行く」といふ事の日々の確認だった。だからこそ僕らは「日々の生き生きとした生を！」という叫びの雄叫びをあげたのではなかつた！「精神労働者」を「うしろめたい幸福」と見なす（それ故に「自己否定」といふ坊主的な形をとる。「自己変革」も同様。）「精神労働者」自身の間人としての一面性、「ブルジョア社会」への「人民」の、ではなく自分の「隷属」を感受し得ない欲求の貧しさを越えて行かなければならない。人間は自分の欲求を人間的に豊かなものとして形成しなければ解放され得ない。「自己否定」論者は、自分自身の「精神労働者」としての一面性、惨めさを認識しない限り、どんなに「自己否定」を重ねても「上半身」の運動に止まり、遂にこのブルジョア社会を越える事はできないだろう。

次に「帝国主義」が、極めて一面的、政治的に理解されているという点を指摘しなければならぬ。一語で言えば「市民社

会論」の欠落という事である。同じ事だが、近代ブルジョア社会における「隷属」の構造に対する無理解ということである。

僕らは抬頭した「秩序派」の中に、その「隷属」の構造を対象的に鮮やかに見たであろう。ここで、一つ、二つエピソードを紹介したい。工学部の「一般学生」の諸君は僕らがストのピケを張つてみると「我々には授業を受ける権利がある」と言い、道路にバリケードを築くと「通交権がある」と言う。彼らが何故に自分の欲求を「権」という抽象的、「一般的」な形で表現するかと言えば、「彼らはそれ故に「一般学生」なのだが」それは、自分の欲求を裸で主張する事は、我ながら自分の欲求の惨めで、私的でユダヤ的な腐臭が鼻をつくために、自分の欲求に幻想的な「普遍性」の聖油を塗りつける必要を感じるからである。それは、何の事は無い、彼らが自覚しているようがいまいが、要するに「我々の背後には機動隊（国家権力）がついているのだ」という喝なのである。そういう彼らが機動隊の導入に反対すると言ひ、「確認書」まで取つている！ここには、小ブルジョアの滑稽で愚劣でだらしない矛盾がくつきりと浮かび上がっているが、それは同時に近代ブルジョア社会における「隷属」の形をも示している。ここでは現象的は政治権力への隷属が問題になつているように見えるが、彼らに「授業を受けねばならぬ」と思わしめる力は「家族」などを媒介して現われる資本の社会的な力なのだから、本質的には「社会的隷属」が問題とされているのである。もう一つエピソードを紹介して検討しよう。僕らと共に闘いながら「反省組」となつた一学友は「こんな事をしたのだから、就職はもう無理だ。そして

このまま頭張つても思想家や理論家としてやつて行けそうにはないから無意味だ。残された道は大学院へ行くだけだ」と考え、授業にやたらと出席して、学者になる為、勉強しているそう。こうして誕生する「学者」の「惨めさ」「精神労働者」の予備軍としての、この学友及び先の工学部の学友に現象した「惨めさ」は何故のものか？「帝国主義大学解体」のスローガンは、こうした学友達の「惨めさ」II「社会的隷属」を對象化した、それを突破し得る方向性を示しているだろうか？僕には「帝国主義大学解体」の運動は自分の「惨めさ」II「隷属」が何に基づくものであるのかを理解していかないラッパイト運動のように思われて仕方がない。それとも、自分達は「彼ら」とは「眞」の違つた人間なので、「彼らの惨めさ」II「隷属」II「彼らの苦しみ？」とは初めから無縁なのだと錯覚して自分を「聖別」するのだろうか？東大斗争はそういう「聖者達」の運動だつたのか？大学が「帝国主義の人民支配の一つの横杆」になつてゐるから斗うというのは、大学として現前しているブルジョア社会の自分にとつての矛盾を捨棄した「聖者」の斗いではないのか？「インテリゲンチヤアの“良心”」などという「聖者」の寝言を誰が信用できようか？自分のために斗うのでない「斗い」を誰が信用できようか？自分はこのブルジョア社会では生き生きとして生きて行けないと感受する所から本物の斗いが始まるのである。そうであればこそ僕らの斗いが「現実的に普遍的な斗い」となり得るのである。

この本の著者は「産学協同路線」を「個別資本と研究室との

結びつき」とか、「独占資本の要請に従うこと」とかいう風に理解して「批判」している。しかし「解放派」の人達の言うのは、そういう意味ではないだろう。近代ブルジョア社会における隷属の特徴は、それが「自由な自己活動」、「主体性」の外観に覆われているという所にある。「社会を進歩させるため」という麗しい「主体的」を決断によつて、「帝国」の土台をなしている「市民社会」の要請II「総資本」の要請に従うII「隷属」する、というのがその構造なのである。だから自分がブルジョア社会に「隷属」していることを自覚していかない事こそ、自分が深くブルジョア社会に「隷属」している証拠なのである。人間が変わるといふことは人間関係が変わるといふ事以外の何ものでもない以上、いかに逆立ちして「自己変革」しても、この「隷属」から自由になる事はあり得ないにも拘わらず、先に書いた学友達の「惨めさ」II「隷属」を自分とは無縁のものとしてしまひ、自分自身の「隷属」として感受し得ない多くの「マルクス主義者」達は、現世を超越した何という坊主ぶりだろうか？彼らは自分が何故斗うのかを理解していない。ある日突然、「人民を救済せよ」といふ神のお告げを受けて、彼は「マルクス主義者」となつたのである。ルーゲに宛てた手紙の中で、マルクスはこう言つてゐる、「私の仕事は世界が一体何故斗うのかを示すことにある」と。(「造反有理」といふのはこの辺の消息をよく把握した名言である)それにも拘わらず、不肖の弟子達は、自分が何故斗うのかを理解しようとしせず、自分は「人民」のために、「マルクス主義」のために一身を奉ずるのだと思ひ込んでいる。そういう人達は「資本論」

が「否定の否定（資本制的私的所有の否定）」は、生産手段の共同所有を基礎とした個人的所有を確立する」と言っているのを、たとえ予感的にはふれ理解することはできないだろう、社会主義的所有と言われているものの内容は、全人民所有などというインチキなものではないのであつて個人的所有なのだという事を。「共斗会議」のすばらしさは、それを予感として理解し得る現実的基礎を予感的に提供した所にあるのにも拘わらず。ルイ十四世は「私は国家である」と言つたが、僕は「私は世界である」と言おう。この意味が実感的に解る人は「個人的所有」の意味の解る人である。

ブルジョア社会の矛盾はいろいろあるが、様々な現象的矛盾を規定している、最奥の矛盾は「社会的隷属」である。ヘーゲル流に言えば、これこそが、「存在」を「制限」乃至「否定」している当のものであつて、感情の上では「苦痛」「不安」「孤独」「空しさ」「惨めさ」等々という「否定的感情」従つて「否定」を「否定」しようとする「斗い」への衝動を生み出すのである。ブルジョア社会における外観的な「自由」の氾濫の中で、このブルジョア社会の墓場人たち労働者自身も常にこの「社会的隷属」を実感しているわけではない。（通常は実感していない）しかし労働者は例えば「資本」の合理化攻勢において「資本」に「隷属」している自分の「惨めさ」を文字通り「死」として感受せざるを得ない。「自己変革」によつてその「隷属」から自由になつているなどという妄想の入りこむ余地はここにはない。ここにこそ労働者階級の徹底的な革命性がある。

る。先に見た学友達（従つて僕ら自身）の「隷属」はこの労働者階級の「隷属」の一つの「変型」なのである。「社会的隷属」をそれとして実感的に理解するといふ事は、自分がそれだけ豊かになる事であり、より深く、より広い人間的結合を形成しようとする衝動を獲得するといふ事である。ブルジョア社会における最奥の矛盾たる「社会的隷属」を実感的に認識しつつ斗うのでなければ、どんなに激しく「国家権力」と激突しようと彼が対決してゐるのはあくまで外的な「国家権力」なのであつて「ブルジョア社会」ではないのである。彼は「ブルジョア社会」を越えていないのであつて、従つてスターリニストの地平に止まつてしまふし、「国家」を止揚することはできないのである。

この人達はあるいはこう反論するかも知れない。「国家権力を握らなければ結局何もできないのだ」と。そうして彼らは国家権力によつて人間関係を変え、人間を豊かにしてやるうといふのである。これは悪名高き「二段階戦略」以外の何ものであるう。こういう発想をするなら「民主連合政府構想」の方がどんなにリアリティがあるだろう。僕は戦略論については無知であるが、「革命の根本問題は権力の問題である」といふ事は知つてゐる。しかし、そゝいう高級な戦略論議は、少くともブルジョア革命とプロレタリア革命の根本的な相異をはつきりと把握してからやつて欲しいと思ふものである。

僕自身も含めて「斗い」の根源を対的に十分自覚してゐたとは言えない面はあつたにせよ「ブルジョア社会」に「隷属」してゐる「惨めさ」を越え、新しい「社会」の現実的基礎である、

生き生きとした人間の肉体的結合の強さとすばらしさを実践的に開示したものが一月十八日、十九日の斗いであった。ここにこそ、あの斗いが、ブルジョア社会を震撼せしめた理由があったのである。

P・S「ノン・セクト問題」などあつたようなので、僕自身の党派的立場について一寸一言。

僕が以上に展開した事や常々、考えている事は「独自」に獲得したものであるが「解放派」との新近性は一見して明らかである。にも拘わらず、僕自身はこのセクトとも自分を「一体化」してはいない。それは就中「戦略論」等々について、

「感性的直感」以外に、それを判断するだけの主体的力量を欠いていると自分で感じていたからである。僕は、自分の考えて他人を動かすものも嫌だが、他人の考えで自分が動くのも嫌なのである。だから心情としてはノン・セクトに近い。但し、十二月の「解放派」と「革マル派」との必然的な分派斗争には、こういう陰惨な分派斗争の愚劣さを感じて、長く呻吟した後、「死」とは言わないまでも「重傷」位は「覚悟」して「参加」したような事もあるので、ノン・セクトではなし。

救 対 通 信

獄中の同志諸君、我々の斗いは徐々にはあるが権力の策動を切り崩しつつある。

獄中での出廷拒否の貫徹は、裁判官の、何ら正当な理由なく出廷拒否をしている云々といったデマ宣伝は、彼の意図とはうらはらに、ますます分離裁判、欠席裁判強行が不当なものであり、獄中同志の出廷拒否が統一公判を要求し、分離裁判して反対した正当なものであることが大衆的に確認されつつある。

裁判官の血迷った訴訟指揮乱用は、ますます荒れる法廷を作り出しているのが、分離裁判強行、欠席裁判強行であることを示している。そしてそのことは広範な大衆の決起を催がしていることを我々は明確に確認できる。六月二十日には列品館第二グループの分離裁判粉砕の斗いにたちあがつた労働者のうち、二名が退庭拘束をうけ、一名は十五日間の監置をうけた。六月二十六日には山根弁護士が、七月一日には出席弁護団十一名全員が退庭拘束をうける、という暴挙があつた。そして、七月二日には武蔵野三層解放斗争救援会の人々十二名が参加し、ものべながおき氏が七日間の監置をうけた。このような地裁の権力的対応は、ますます我々の斗いの隊列を広汎に、そして斗う意志を固めつつあるものとして育ちつつある。そして、地裁はますます追いつめられつつある。そのことは、延史の暴行にた

いする世論のもしあがりのために、廷史の再教育を行なり、とせざるをえなかつたように、また長期拘留が社会問題化しつつある現在、保釈について、何らかの結着をつけざるをえなくなっていることからうかがわれる。

獄中の諸君、半年にわたる獄中斗争を果敢に展開している諸君の姿に、広範な部分の支援がまきおこつている。即時釈放の斗いはおこりつつある。

ここで我々は保釈についての問題提起をしておこう。我々の斗いの第一のスローガンは四、三分割方針全面撤回ではなからうか。そうであるならば保釈の問題は現在の分割方針案を認める形では、ましてや分割に応じさせるための、権力の政治的対応としての保釈は認められようか。我々の斗いは出廷拒否という形態でしか分離裁判粉碎の斗いがくみえないとしたなら、それは我々の弱さを示すにすぎない。法廷での粉碎斗争を十分展開できるまで我々の戦列を強化せねばならず、そのためには早期に被告団を結成する必要がある。そのような保釈後の斗いの強化とともに、分割方式に引込むような保釈には、断乎拒否する斗いが必要ではなからうか。我々の、諸君を我々の手にひきもどす斗いは、分割方針をのむことによつてではなく、大衆斗争として現在の長期拘留、高額保釈金の積上げへの反対斗争をくむなかから、大衆の力でもつて奪い取ることはなからうか。このことは救済からの問題提起である。獄中同志諸君の討論をまします。

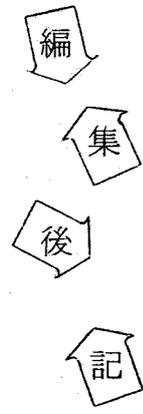
七・一九に我々は大集会を用意している。騒乱羅、皮防法粉

砕、東大斗争統一公判獲得、全政治犯即時釈放のスローガンのもと、我々は万余の隊列でもつて東京地裁を包囲するであろう。我々の隊列は、七・一九集会を大きな目標にますます強まっている。獄中の同志諸君、更なる斗いを貫徹せられんことを。

―情 宣 部―

分離裁判粉碎日程表

月 日	時 間	法 廷	グループ名
7 - 11	10:00	701	法 研(5)
	1:00	502	ラグビー(1)
7 - 12	1:00	303	神 田 お茶の水
7 - 14	10:00	703	安 田(4)
	10:00		本郷三丁目
7 - 15	10:00	701	安 田(8)
	10:00	501	法 研(1)
	1:00	703	安 田(3)
7 - 16	10:00	502	安 田(11)
	10:00	701	安 田(16)
	1:00	702	安 田(10)
7 - 17	10:00	506	列 品(2)
	10:00	702	安 田(20)
	10:00	501	安 田(1)
	1:00	503	安 田(12)
7 - 18	10:00	701	法 研(3)
	10:00		本郷三丁目
	1:00	703	ラグビー(1)
	1:30	505	安 田(19)
7 - 19	10:00	703	安 田(6)
7 - 21	10:00	703	安 田(13)
7 - 22	10:00		安 田(18)
	1:00	0	安 田(少年)



《雑感》

人知れず小さき斗いに生衝している人々、華やかなスポットライトを浴びた東大・日大斗争、エトセトラの陰に何と多くの斗いがひそんでいることか。共に連帯しようという事は容易。連帯とは何なのか？私にとつては彼らの小さき斗いを見いだしたただけでたのもしく、うれしい。しかし彼らにとつて私はどうなのか………。(朗)

生き生きと生きるために闘う。しかしそれは必然的に普遍化される運命にある。他の解放——他との生き生きした結合、なしにはすなわちブルジョア社会秩序をその根底から廃絶し、真に生き生きした人間関係を創出することなしには生き生きと生きることはできないという重い現実。

生き生きと生きるために闘い、うめき、わめき、悶え、泣き、笑い、怒り、叫び、なやみ、苦しみ、頭をかかえ、歩き、走り駆け、焦つてころぶ。そして恋もする。

あらゆる人間的なことをやってみる。A徒勞V。すべてA徒勞Vなのだという、痛苦に充ちた予感。

生きる理由を見つけるために

ぼくは君を愛する理由を打ち壊そうと試みた

君を愛する理由を見つけるために

ぼくはつたない生き方をした。

P. H. J. U. R. L. < La Vie immediate >

獄中の同志諸君!! 我々は要望する。すべての郵便物にA区分導入反対Vと記入することを。(影丸)

バックナンバー有。一部送料共七十五円(但し六・七合併号のみ百二十五円)購読料を添えて左記宛お申し込み下さい。なお、定期購読御希望の方は、五五〇円(八号分)単位でお申し込み下さい。
文京区向丘一の十二の七 東大追分寮内
「ぶりずむ社」(發送センター)
加藤 五郎
(銀行振込 第一銀行本郷支店 普通預金)

第十三号 七月十一日発行
発行 者 「獄中書簡集」発刊委員会
加藤 二郎
A連絡先V 文京区向丘一の十二の七
東大追分寮内
電話 八一一 二三六八
真崎 猛 哲

非売品・無断転載禁ず